

岩手県医師支援推進室 医師支援推進担当課長
福士 昭（東日本大震災小児医療復興新生事務局 第3代 代表）



「東日本大震災から5年 ～子どもたちの笑顔のために～」
平成23年3月11日。岩手・宮城・福島に未曾有の被害をもたらした東日本大震災。
あれから5年の節目の日を迎えました。

あの日、あの津波は、私たちから、かけがえのない人や家族で過ごした大事な場所、思い出がいっぱい詰まった大切なものなど、全てを奪い去っていきました。そして、5年の歳月が流れた今でも、深い悲しみが癒えることはありません。

津波の被害により深い傷跡を残した被災地では、街の復興と生活の再建に向けて槌音が鳴り響いていますが、まだまだ復興の途上にあり、今もなお、多くの方々が応急仮設住宅等での不自由な生活を余儀なくされるなど、被災者の生活は依然として厳しい状況におかれています。

このような中、私たちに希望の光を照らし、子どもたちの笑顔を取り戻すために、救いの手を差し伸べてくれたのが全国の小児科医師の皆様による温かいご支援でした。

これまでの幾多にわたるご支援に対し、この場をお借りして厚く御礼申し上げますとともに、本事業を支えてくださる学会関係者や関係大学の皆様、関係各位のご尽力に対し、深く敬意を表する次第です。

この事業をきっかけに生まれた被災地と全国の小児科医師の皆さんと結ばれた命の絆は、あの日から5年が経過した今もしっかりと受け継がれています。そして、その支援の輪はさらに広がり続けています。

これからも将来にわたって、子どもたちとそれを見守る全ての方々がそれぞれの地域で安心して健康で暮らせるよう、この事業が未来ある子どもたちの健やかな成長を支え、命をつなぐ希望の灯として、「ほそく ながく」ともし続けていけることを強く願っております。

今後とも、被災3県の9病院・施設へのご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。
2016.3.11

東日本大震災小児医療復興新生事務局を担当しております岩手県医師支援推進室です。
全国の小児科医師の皆様には、日頃から本事業の取組につきまして、御理解と御協力をいただき厚く御礼申し上げます。

これまでに全国の先生方からいただいた温かいご支援が、将来の地域の担い手となる子どもたちや、地域医療の確保に奔走する医療関係者の皆さんにとって、どんなに心強く、安心感をもたらしたのか計り知れません。

岩手・宮城・福島に甚大な被害をもたらした東日本大震災からの復興事業も本格化し、岩手県では被災した県立病院の再建が順調に進められています。

これからも被災地をはじめ、それぞれの地域で、子どもたちや保護者の方々、住民の皆さんが安心して健康で暮らせるよう、この事業が未来ある子どもたちの健やかな成長を支え、命をつなぐ希望の灯として、「ほそく ながく」ともし続けていけることを強く願っております。
今後とも、被災3県8病院・施設へのご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2015.6.15

岩手県医師支援推進室 医師支援推進担当課長
高橋 幸代（東日本大震災小児医療復興新生事務局 第2代 代表）



東日本大震災小児医療復興新生事務局を担当しております岩手県医師支援推進室です。

全国の小児科医師のみなさまには、日頃から本事業へご協力をいただいておりますことに心から感謝を申し上げます。

特に、今年4月に日本小児救急医学会のみなさまへ「東日本大震災小児医療復興新生事務局 医師公募チラシ」を配布させていただいたところ、全国からたくさんのご支援のお申し出をいただき、感激しております。

被災3県8病院の各地域の子どもたちや保護者のみなさま、そして医療スタッフにとって、全国の先生方からのご支援は、本当に心強く、有り難い限りです。

今後も、この温かいご支援の輪が「ほそく ながく」つむがれていくようにと願っております。どうぞ、これからもご支援の程よろしくお願い申し上げます。

2014.5.12

岩手県医師支援推進室
三田 崇雄



岩手県では、今回の震災により被害が大きかった沿岸部、特に気仙医療圏（大船渡市、陸前高田市、住田町）において、小児科を標榜する5施設のうち3施設が津波により全壊しました。このため、県立大船渡病院及び仮設の県立高田病院では外来患者数が急増しているほか、内陸の後方支援となるべき病院においても医師が不足し、全国からの支援を得ながら圏域の小児医療を維持している状況にあります。

これまで、日本小児科学会をはじめとして全国のみなさまからご支援をいただいておりますが、今後も継続して支援をお願いしなければならない状況にあります。

被災地の復興のために、是非医師の皆様のお力をお貸しください。ご連絡をお待ちしております。

2013.4.27